





学位論文審査の結果及び最終試験の結果の要旨

学位申請者氏名	田村 瞬至		
学位論文名	触診による高齢者の喉頭位の高さと嚥下機能との関連性について (Relationship between larynx position measured by palpation and swallowing function in older adults)		
論文審査委員	主査：	松本歯科大学 教授	金銅 英二 
	副査：	松本歯科大学 教授	樋口 大輔 
	副査：	松本歯科大学 教授	増田 裕次 
	副査：		
	副査：		
最終試験	実施年月日	2022 年 2 月 28 日	
	試験方法	<input type="checkbox"/> 口答 ・ <input checked="" type="checkbox"/> 筆答	

学位論文の要旨

【目的】

嚥下機能の評価方法には精密検査として嚥下内視鏡検査や造影検査が広く行われているが、病院への受診が困難な場合や患者の協力状態によって行えない場合がある。また、精密検査であるため読影に経験を要する。その精密検査の必要性を判断するためスクリーニング検査を実施するのが一般的であるが、代表的な嚥下障害のスクリーニング検査として反復唾液嚥下テストや改訂水飲みテストが挙げられる。しかしながら、いずれの方法も患者との意思通が必要であり、さらに誤嚥を生じさせる危険性が伴う危険性がある。そこで、今回は手指による喉頭位の計測方法について簡便で安全性の高いスクリーニング検査法を新たに考案し、その有用性について検討した。

【方法】

2018年1月から2021年3月までに松本歯科大学病院で摂食嚥下障害に関して外来診療または訪問診療を行った60歳以上の患者73名を対象に、喉頭位の高さのほかに医療面接で年齢、性別、基礎疾患、発熱の有無頻度、ムセの頻度と、スクリーニングとして行った反復唾液嚥下テストと改訂水飲みテストの値、頸部聴診時の湿性音の有無を調査対象とした。精密検査は嚥下内視鏡検査または造影検査の少なくとも一方を実施し、咽頭収縮力、喉頭蓋の反転、喉頭侵入や誤嚥の有無、舌運動、咀嚼運動、軟口蓋挙上運動について評価した。

喉頭位の高さは前頸部に手指4本をあて、鎖骨内端上縁と下顎骨で検査者の手指を挟むよう指示を行い、頸部に対する相対的な喉頭隆起の位置を測定した。触診した高さによりH,M,Lの3段階に分類した。喉頭位の高さの違いによって上記の評価項目に差があるのかについて統計学的に検討した。

【結果】

その結果、喉頭位の高さが低い群(L群)ほど平均年齢が高くなった。また、L群では性差も認められた。さらに反復唾液嚥下テスト平均回数の減少があり、ムセの頻度、喉頭蓋反転不良が増加する傾向にあったが、統計学的には有意差は認められなかった。しかし、喉頭位の低下により喉頭侵入、誤嚥において統計学的に有意な増加が認められた。

【考察】

男性は喉頭の高さや重さが女性に比べ値が大きくなると考えられる。この結果は舌骨の位置を用いた他の研究と同様であった。今後、触診による喉頭位の高さの評価に加えて、医療面接やスクリーニング検査値を併用することで患者の協力を得難い状態や訪問歯科診療下

(様式第 13 号)

などにおいて、嚥下内視鏡、造影検査が行えない状況でも喉頭侵入や誤嚥を判定できる一助となり、簡便で安全性の高いスクリーニング検査法となる可能性が示唆された。

学位論文審査結果の要旨

超高齢社会に伴い、嚥下機能の評価やリハビリテーション指導は重要な分野となっている。嚥下状態の判定には内視鏡検査や造影検査、各種スクリーニングテストが行われているが、高齢患者には受診困難な症例や患者の協力を得られない場合がある。本研究では、甲状軟骨の相対的な位置の変化が嚥下機能にどのような影響を与えるかを検討したものであり、従来の検査が実施困難な症例において嚥下機能を類推する上で重要であると判断される。

本研究では、触診により喉頭位を比率という形で三段階に分類を行い、検査によって得られた評価項目との関係を示している。その結果、喉頭位の低い症例では、喉頭侵入や誤嚥を生じる可能性が高くなることを明らかにしている。

本論文は、内視鏡検査、造影検査が行えない状況・患者でも喉頭侵入や誤嚥の判定に示唆を与える点で有用であり、患者の嚥下機能評価における簡便で安全なスクリーニングという意義があると思われる。

以上より、申請者は博士課程修了者として十分な知識と技能を修得していると判断され、本論文は学位論文に値するものと認める。

最終試験結果の要旨

申請者の学位申請論文 「触診による高齢者の喉頭位の高さと嚥下機能との関連性について (Relationship between larynx position measured by palpation and swallowing function in the elderly persons)」に対する基礎知識、論文の内容に関わる事柄、研究成果などについて、口頭試問を実施した。

質問事項は以下の通りである。

1. 舌骨と甲状軟骨の関係について
2. 喉頭位低位群における男女間の平均年齢の開きについて
3. 喉頭位の相対的評価について
4. VE での喉頭侵入と誤嚥の判定について
5. 統計法における線形連関の検定について
6. 本研究の限界について

これらの項目に対し申請者よりの確かな回答を得ることができた。以上より、本審査会は学位申請者は博士（歯学）として十分な学力および見識を有するものと認め、最終試験を合格と判定した。

判 定 結 果

合格

・ 不合格

備考

- 1 学位論文名が外国語で表示されている場合には、日本語訳を（ ）を付して記入すること。
- 2 学位論文名が日本語で表示されている場合には、英語訳を（ ）を付して記入すること。
- 3 論文審査委員名の前に、所属機関・職名を記入すること。